

今年、日本絵画史を代表する水墨画家である雪舟等楊（1420-1506?）の生誕600年に当たる記念の年です。山口県立美術館では過去3年間にわたり、この山口ゆかりの大画家の画業を検証する展覧会を開催してまいりました。具体的には、84年ぶりに発見された「倣夏珪山水図」を紹介した《雪舟発見！展》

（2017）、作品の伝来（どのようにして伝えられてきたか）をテーマにした《山水図巻の謎》（2018）、若き日の大作〈騎獅文殊・黄初平・張果老図〉を中心とした《雪舟の仏画》（2019）です。本展では、この3つの展覧会の主要な作品から厳選した雪舟作品をあらためて紹介します。

また、雪舟の^{ひっせい}畢生の大作である〈四季山水図（山水長巻）〉を展示する毛利博物館の《国宝展》と連携し、〈四季山水図の原寸大模写〉や、雲谷等顔、等益など、〈四季山水図〉に学んだ雲谷派の画家たちの優品もご覧いただきます。ゆったりとした空間のなかで、雪舟とその流れをくむ毛利家御用絵師・雲谷派の画家たちの作品をじっくりとご鑑賞ください。

◎継続展示 概要（香月泰男展については、全点展示替）

① 《Distance—ディスタンス》

出品点数：17点（立体作品6点、写真10点、油彩1点）

今、人と人とのディスタンス（距離）が問題となっています。「自分と他人」という場合の「と」が含まれていた自然な距離感が、「ソーシャルディスタンス」という言葉によって、少し広げられているのです。

本展のテーマは、このふたつのモノゴトを結びつけている「と」。展示においては、「生と死」、「男と女」など、6つのキーワードに沿って、身の回りにある、あるいは実はないかもしれないディスタンスをご紹介します。当然と思っていた「と」の距離感が少し変わること、見慣れた作品、そして世界も新鮮に映るかもしれません。

【おもな出品作品】

（キーワード、タイトル、制作年、作家名）

●EAST & WEST

《ゆあみ》1907 新海竹太郎

●生と死

《漂流》1958 豊福知徳

●明治と大正

《トルソ》1981 植木茂

●みるとみられる

《UFO》1986 松井紫朗

●男と女

《逃れゆく思念》1986 深井隆

●偽りと真実

《MASK-AN》1968 澄川喜一

※本年度文化勲章受章

② 《香月泰男 — “私”のシベリア—II》

出品点数：6点

洋画家の香月泰男（1911-74）は山口県長門市三隅に生まれ、この地で数多くの優れた作品を描きました。画家としてのキャリアや芸術的な展開において、そして一人の日本人として、その生涯に決定的な影響を与えたのが、太平洋戦争への従軍と、敗戦後のシベリア抑留でした。およそ4年半の戦争と抑留の体験を、帰国後、香月はその4倍の歳月をかけて57点の油彩画に描きます。

いつしか「シベリア・シリーズ」と呼ばれるようになった、画家の記憶と記録。「シベリアを描きながら、私はもう一度シベリアを体験している」と語った香月が、シリーズに込めた想いを5つのテーマで辿ります。

【出品作品】

《青の太陽》1969 香月泰男

《避難民》1960 香月泰男

《雪》1963 香月泰男

《復員〈タラップ〉》1967 香月泰男

《日の出》1974 香月泰男

《月の出》1974 香月泰男